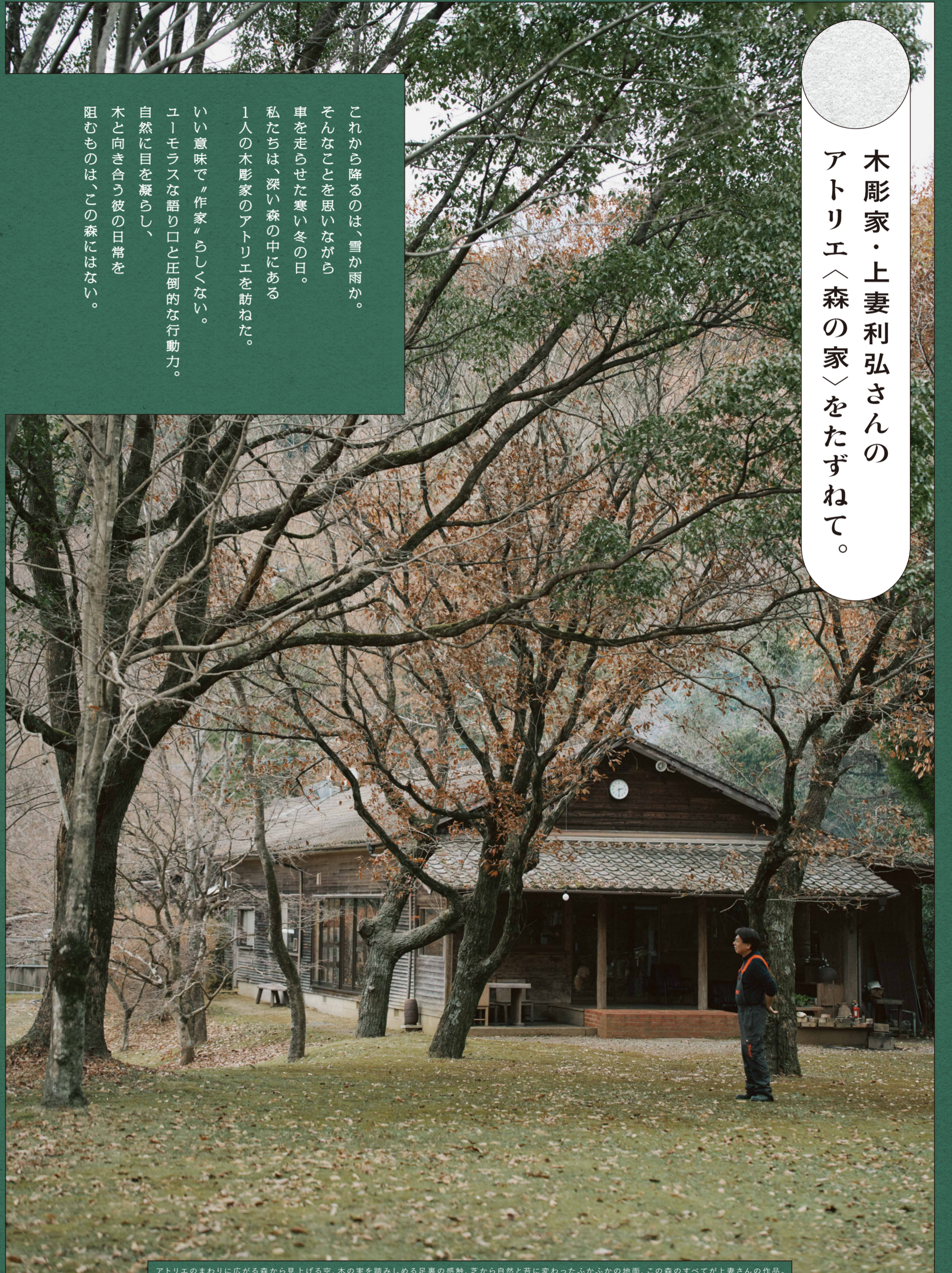


木彫家・上妻利弘さんのアトリエ(森の家)をたずねて。



これから降るのは、雪か雨か。そんなことを思いながら車を走らせた寒い冬の日。私たちは、深い森の中にある1人の木彫家のアトリエを訪ねた。いい意味で「作家らしくない」。ユーモラスな語り口と圧倒的な行動力。自然に目を凝らし、木と向き合う彼の日常を、阻むものは、この森にはない。

取り組んだのは、心地よく作品を作り出せる環境作りだった。昔からランドスケープデザインや建築が好きだったから、そういう本はたくさん読んでいたよ。図面は頭の中にしかないぼってん、とにかく「ここにこれがあったらいいな」というような感覚で、森も作品も作れたらよかたいたい。

間に眺めては、そのことに深い安心感を覚えるという。「この山も一度ゴルフ場の開発の話があったけど、たち消えになって本当に良かったよ。ここには、自然に発芽した野生種のコナラやクチナシも、ビワもあるとたい。ほんの小さな苗だった木もこげんくなってからね。成長を見られるとも20代でここを作ったからだよね」。

思い描く環境は、時間をかけないと叶わないけれど、そこに毎日身を置き、絶え間なく視線を向けてあげる事が大切だと作家は語った。昨年、結婚したばかりの長女が中学校に上がる頃、自転車通学で急勾配の山道を行き来するのはさすがに厳しいと、家族の生活を国道沿いの新居に移すまでは、家族でこのアトリエに暮らしていたという。子どもたちが大人になった今、再びここに集い、顔を突き合わせて仕事をすると風景が上妻家の日常だ。取材時、一家は2022年の春に再オープン控えたカフェギャラリ「KORO」の準備とスコーンの定期便の発送業務に追われていた。「私はこの町で生まれ育って、一度も外に出て暮らしたことはないけど、自分が理想とする生活の中で子どもを育てあげることができた。ここを拠点に、東京でも海外でも行けばいいと思うんだよ」。



「30年かけてやっと完成したかな」。26歳の時、元々みかん畑だった耕作放棄地を整理し、木を植えてきた作家は、自ら育てあげた森を見上げてポツリと呟いた。電気もガスも通っていない山の上で、2年間。1人きりでアトリエの環境づくりに励んでいた彼を見て、周囲の人は首をかしげていたという。「いい意味であんまり人の話を聞かんかったかな(笑)。ものを作るのは、エネルギーが要ることだから。ある程度、自分の世界を持つとかんといかんよな」と笑い飛ばす。ユーモアたっぷりな語り口も、お気に入りをつなぎを纏った竹ましも、いい意味で「作家らしくない。若き日の作家が、荒れ果てた山の上に立ち、覚悟を決めた瞬間を思った」。

上妻さんが一貫して作り続けている「SEIMEI」シリーズは、椅子やオブジェなど、どれも機械的な線が一切見当たらない有機的なフォルムが特長だ。目の前の木から浮かび上がるイメージを、図面も引くことなく自らの感覚とお手製の道具だけを頼りに作品を削り出していく。「人間のための用途はさておき、目の前のモノに対して考えらる」と話すアトリエには、植物とも、生き物とも取れるフォルムに、ハッとするような鮮やかな色が添えられた作品群が舞う。それは、いつからか「種」として区別されてきた名もなき生命あるものたちの存在を、再認識させてくれるもの。

木が伐り頃を迎えるのは、大体40年〜50年。最近、上妻さんは父の代で植えたヒノキを伐り出し、丸太から製材して作品を作ったことを、うれしそうに話してくれた。作家活動を始めた頃から、この山から見下ろす景色はほとんど変わっていない。毎日、作業の合

間にも春がやってくる。土の中に眠る無数の生命が芽吹くころにはまた、新しい世界が広がっているはずだ。

玉名郡和水町に生まれた木彫家の上妻利弘さんは、幼い頃からものづくりの得意な祖父の姿を見て育った。庭先で鶏を飼う籠や、あけびの蔓で作ったザル、竹の鞘を削った道具に至るまで、暮らしに密着した道具のほとんどを手作りするのが常だった。ものづくりにはずっと触れてきたものの、木工はすべて我流。20代の初めにアメリカ猪祥の彫刻・デコイに魅せられ、バードカービングを始めたことを機に、本格的に木工作家を志すように。森は、使うばかりじゃあ無くなっていくばかりじゃないですか。育てて、植えて、伐って…作るサイクルの中で、自分が森を作っていくことも必要だと思って。作家として活動を続けるために



家活動を始めた頃から、この山から見下ろす景色はほとんど変わっていない。毎日、作業の合

間にも春がやってくる。土の中に眠る無数の生命が芽吹くころにはまた、新しい世界が広がっているはずだ。

間にも春がやってくる。土の中に眠る無数の生命が芽吹くころにはまた、新しい世界が広がっているはずだ。

PROFILE 上妻 利弘

幼い頃から祖父にならって自然の中でものづくりを学ぶ。26歳の時に耕作放棄地だった玉名郡和水町の山を自ら整理し、自らの手でアトリエ「森の家」を建てる。木工家具やオブジェ、雑貨を作る木工作家として国内外で活動を行う。一方で、木を削る楽しさを伝えるワークショップもライフワークのひとつとして続けている。

IG @toshihirokozuma



「KORO」の準備とスコーンの定期便の発送業務に追われていた。「私はこの町で生まれ育って、一度も外に出て暮らしたことはないけど、自分が理想とする生活の中で子どもを育てあげることができた。ここを拠点に、東京でも海外でも行けばいいと思うんだよ」。



- 1 どんぐりも猫も、人も、分け隔てなく自然に受け入れてもらえる土壌がある。
2 有機的なフォルムが特徴的な代表作「SEIMEI」シリーズが踊るアトリエの天井。
3 アトリエの隅を囲む大きな時計。ここは人としての基本を育む学校のようにも感じた。
4 植物なのか、生き物なのか。「木には、人の基本が詰まっている」と上妻さん。
5 上妻さんの手がけた家具やオブジェが彩るアトリエ全景。

アトリエのまわりには広がる森から見上げる空、木の実を踏みしめる足裏の感触、芝から自然と苔に変わったふかふかの地面、この森のすべてが上妻さんの作品。